

やまなし
医療最前線
がん治療の今
県立中央病院から

〈230〉



浅川幸子医師

を病院の目標に掲げる山梨県立中央病院は、消化管がんの内視鏡治療で入院日数の短さが全国トップクラスを誇る。同院内視鏡科部長

山梨県立中央病院
内視鏡的粘膜下層剥離術の平均入院日数
(2020年度)

食道	6.3日 (254病院中14位、他病院の平均9.2日)
胃	4.5日 (333病院中2位、他病院の平均8.7日)
大腸	2.9日 (271病院中1位、他病院の平均8.3日)

※順位、他病院のデータは民間会社「ヒラソル」による集計

早期発見の消化管がん
内視鏡治療で入院短縮

食道や胃、大腸などの消化管にできる早期がんの一部は、外科手術を行わずに内視鏡で切除することができ、「早くきれいに治す」

の浅川幸子医師は「良好な治療実績が入院日数の短縮につながっている」と説明している。

浅川医師によると、内視鏡治療は以前、先端に取り付けた金属製の輪で病変を縛って切除するしかなく、病変の大きさや形状によっ

ては完全に取り切れない課 0施設以上の平均に比べて

少なくはなっていない。2020年度は大腸が2・9日、胃が4・5日、食道が6・3日だった。全国の病院200

題があった。ナイフなどの専用器具を取り付けて病変を切り取る「内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）」が登場したことで、複雑な形状で範囲も広い病変への対応が可能になった。

山梨県立中央病院も国内で開始された初期からESDによる治療を取り入れ、食道、胃、大腸を合わせて年間100〜200件実施。治療による平均入院日数は年々

大幅に短い。「合併症などにより予後が悪いと入院期間は延びてしまう。内視鏡治療の適応を見極め、安全を意識して実施していることが良好な結果につながっている。難しい大型病変も可能な範囲で内視鏡治療を行っている」と浅川医師。壁が薄く医師に高度な技術が求められる十二指腸の内視鏡治療についても、同院は副院長